

WG 活動報告

1:急性骨髄性白血病(AML)【小児】

① WG メンバーリスト

氏名	所属	診療科
責任者 工藤 寿子	地方独立行政法人 静岡県立病院機構 静岡県立こども病院	血液腫瘍科
多賀 崇	滋賀医科大学附属病院	小児科
富澤 大輔	東京医科歯科大学医学部附属病院	小児科
岡本 康裕	鹿児島大学病院	小児診療センター 小児科
田淵 健	がん・感染症センター都立駒込病院	小児科
石田 宏之	京都府立医科大学附属病院	小児科
坂口 大俊	名古屋大学医学部附属病院	小児科
岩崎 史記	神奈川県立こども医療センター	血液・再生医療科
長谷川 大一郎	兵庫県立こども病院	血液腫瘍科
清水 崇史	東海大学医学部附属病院	小児科・細胞移植科
足立 壮一	京都大学医学研究科	人間健康科学系専攻
渡邊 修大	社会保険中京病院	小児科
村松 秀城	名古屋大学医学部附属病院	小児科
小嶋 靖子	東邦大学医療センター大森病院	小児科

②2012 年 12 月末時点で承認された研究、及び業績一覧

1-1	「小児 AML における第 2 寛解期再移植例の成績と再移植の意義」 PI: 多賀 崇
<p>学会発表: 多賀崇他 第 74 回日本血液学会学術集会(2012 年 10 月 19 日-21 日) 国立京都国際会館</p> <p>論文業績: 執筆中</p>	
1-2	「非寛解期小児 AML における移植成績」 PI: 岡本 康裕
<p>学会発表: 岡本康裕他 小児急性骨髄性白血病の非寛解期の造血細胞移植術の成績と予後因子の検討 第 34 回日本造血細胞移植学会総会(2012 年 2 月 24 日-25 日) 大阪国際会議場</p> <p>論文業績: 執筆中</p>	
1-3	「ダウン症候群に合併した急性骨髄性白血病に対する造血幹細胞移植の成績」 PI: 村松 秀城
<p>学会発表: 村松秀城他 第 53 回日本小児血液・がん学会学術集会 (2011 年 11 月 25 日-11 月 27 日) 前橋ベイシア文化ホール</p> <p>論文業績: Allogeneic stem cell transplantation for acute myeloid leukemia with Down syndrome 投稿中</p>	
1-4	「小児 AML に対する自家移植の解析」 PI: 坂口 大俊
<p>学会発表: 坂口大俊他 第 34 回日本造血細胞移植学会総会 (2012 年 2 月 24 日-2 月 25 日) 大阪国際会議場</p> <p>論文業績: 執筆中</p>	
1-5	「小児・思春期 AML 第一, 第二寛解期に対するアロ造血幹細胞移植前処置の影響」 PI: 石田 宏之
<p>学会発表: 石田 宏之他 第 34 回日本造血細胞移植学会総会 (2012 年 2 月 24 日-2 月 25 日) 大阪国際会議場</p> <p>論文業績: 執筆中</p>	

1-6	「初回寛解期小児急性骨髄性白血病に対する自家骨髄移植を含めた造血幹細胞移植の意義を検証する臨床決断分析」 PI:長谷川 大一郎
学会発表・論文業績:	
1-7	「t(8;21)および inv(16)異常を有する小児急性骨髄性白血病に対する造血幹細胞移植の成績」 PI:村松 秀城
学会発表:村松秀城他 第35回日本造血細胞移植学会総会(2013年3月8日-9日) 石川県立音楽堂	

③会議開催記録(2012年1月-12月)

日時	場所	会議内容
2012/2/25	大阪国際会議場 12F 1201	1.一元管理委員会(2012年1月開催)報告(足立先生) 2.研究課題の進捗状況について検討 3.新規研究課題;t(8;21)および inv(16)異常を有する小児急性骨髄性白血病に対する造血幹細胞移植の成績(担当:村松先生) 4.その他;今後の予定など

④メーリングリストによる意見交換 (メーリングリスト開設から 2012年11月末時点)

(321)回

⑤WGの今後の活動方針・抱負など

<p>1)「t(8;21)および inv(16)異常を有する小児急性骨髄性白血病に対する造血幹細胞移植の成績」や「初回寛解期小児急性骨髄性白血病に対する自家骨髄移植を含めた造血幹細胞移植の意義を検証する臨床決断分析」の研究課題について、引き続き解析を進める。既に学会発表の終了した研究課題については、各担当者が中心となって共著者とともに議論を深め、論文化を目指す。</p> <p>2)特殊な染色体異常を持つサブグループやドナーソース別治療成績、感染症合併の検討など、次年度に向けて新たな研究課題を募集する。</p> <p>3)日本小児白血病リンパ腫研究グループ(JPLSG)や他のWG等との共同研究も検討し、小児AMLにおける化学療法の治療成績とその中における移植の位置づけや晩期障害も考慮したがん経験者のQOLにも目を向け、よりよい移植医療の構築に貢献したいと考える。</p>
